

シチズンシップ教育を意識した英語学習

岡野 友美

(東京大学教育学部附属中等教育学校・英語科)

1 英語教育にシチズンシップ教育をどう盛り込むか

シチズンシップ教育の目的は、「子どもたちが、参加型民主主義を理解・実践するために必要な知識・スキル・価値観を身につけ、行動的な市民となること(『学校における、シチズンシップと民主主義教育のための教育:シチズンシップについての諮問委員会最終答申』(1998年9月))」であるが、そもそも公教育というものが社会を担う人間を育てるという目的を持つのであるとすれば、学校においてシチズンシップ教育と全く関係のない教育活動というものは存在しないだろう。しかし、教科によって、どの程度実践的に扱えるかは大きく異なってくる。英語という教科に関して言えば、社会科ほど直接的ではないにしても、理解や実践において、対象が国内や日本語に留まらないという観点から、発展的にシチズンシップ教育に関わることができると思う。では、英語という教科からシチズンシップ教育をとらえる時、シチズンシップ教育の実践課題である3つのキーワード「コミュニティとの関わり」の育成、「社会的・倫理的責任」の育成、「ポリティカル・リテラシー」の育成(出典:同上)は、どのように授業等に盛り込んでいくことができるであろうか。以下に考察する。

《キーワード別の観点》

(1)「コミュニティとの関わり」の育成

自分が所属するコミュニティを個人から世界に及ぶ大小の単位で認識し、コミュニティとの関わりの中で英語が必要な場面を考えたり、実際に英語をツールとしてコミュニティに参加して意思伝達する。

(2)「社会的・倫理的責任」の育成

英語の素材を通して、情報の収集や取捨選択をし、自分を取り巻く様々な社会の状況を認識し、それをどのように解決してゆけばよいかを主体的に考える。できることを行動に移す。

(3)「ポリティカル・リテラシー」の育成

国際社会を想定した「社会内部や社会観の利益や価値観の対立を調整・解決する政治手段(『地球市民教育の進め方』デイビット・ヒックス、ミアム・スタイナー編岩崎裕保監訳、1997)を学ぶために、理解や参加の技能を英語で学ぶ。できることを行動に移す。

今回の実践で上記のことすべてを実施できたわけではないが、英語の授業内でも以上のようなことが可能であり、今後、教材をうまく活用しながら様々なことを実践していくことができると考える。

2 本校生徒における実践

先に掲げたキーワード別の観点を念頭に置きながら、本校における英語の授業(一部、課外活動)での実践をここに報告する。

● 英語の授業の概要

対象生徒： 本校生徒3年生(118名)

使用教材：

教科書 三省堂 NEW CROWN3

副教材(生徒所有)

教科書準拠 三省堂 英語の基本文型(minibook)3

教科書準拠 三省堂 英単語集

教科書準拠 三省堂 リスニング CD

教育開発出版 新中学問題集 標準編

基礎英語

PENGUIN READERS (Level 1) The Adventures of Tom Sawyer

PENGUIN READERS (Level 2) Alice in Wonderland

副教材(コピー・印刷して配布)

教科書準拠 三省堂 文法ドリル(三省堂 HP よりダウンロード)

教科書準拠 三省堂 ワークブック

生徒の特徴：

全体的にいきいきとしている。騒がしくなることもあるが、概ね様々な活動に対して意欲的に取り組むことができる。仲もよく、グループでも建設的な取り組みができる。英語の発表活動には、年度当初からあまり抵抗感がないようだった。全体的にセンスは良いが、4技能の中では、書く力が弱いようである。

授業の進行：

教科書中心で、各課ごとに文法や表現を学びつつ、表現練習をする。後期には一時間に一人ずつの presentation を実施した。各 Lesson に対応した歌を歌った。

	教科書	題材・学習内容	コンセプト
前期中間まで	Lesson1～3	フィンランドの文化 英語で落語	多文化理解 自国文化の発信
前期末まで	Lesson4～5	・原爆 ・原爆で亡くなった少女① ・他国の家屋や生活様式	戦争と平和 異文化理解

後期中間まで	Lesson5～6	<ul style="list-style-type: none"> ・調べて発表② ・中野区国際交流協会イベントに参加③ ・キング牧師④ ・サンタに手紙を実際に送付 	情報の収集と発信 地域の多文化コミュニティへの参加 人権（平等と差別）
冬休み	教科書の Reading Part の書写と和訳		戦争と平和
学年末まで	Lesson7～8	<ul style="list-style-type: none"> ・夢をもつこと ・ごみ問題 ・アフリカの貧しい村の少年が風車を作った話 ・イギリスに Video Letter を送付⑤ 	社会問題 貧困問題 時事のシェア 国際交流

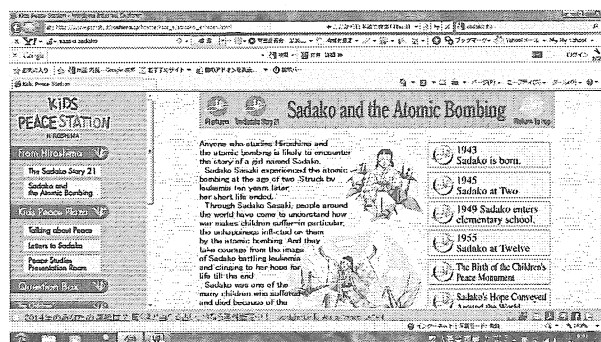
表中の①～⑤について以下に詳細を記す。

実践内容：

①2013年6月～ 英語の授業にて 「平和へのメッセージ」

目的：平和の尊さを、原爆で亡くなった佐々木貞子さんという一人の少女の死から考える

方法：教科書で原爆の恐ろしさと夢半ばに亡くなった貞子さんについて学習後、貞子さんの映像を視聴し、英語で折り紙に平和へのメッセージを書き、折鶴を折って教室に飾った。海外にも貞子像があることを知り、英語や海外の貞子さんに関する web サイトを見て、外から見た「原爆を落とされた国」を考えた。また、モンゴルで有名になった“paper crane”という英語の歌を聴き、他国から見た原爆について考え、意見を発表した。



http://www.pcf.city.hiroshima.jp/frame/kids_e/sadako_e/index.html

②2013年10月～ 英語の授業にて 「3年プレゼンプロジェクト」

目的：身のまわりのことや他国のことについて自分で情報を検索して英語でまとめ、人にわかるように発信する

方法：相手に興味を持ってもらえそうな話題を図書館やインターネットを検索して英語でまとめ、模造紙等を使って発表する。事前にリハーサルを教員と行い、アドバイスをする。

評価：教員が評価。成績に加味した。生徒全員にも評価票を配布し、発表後本人にクラスメイトからの評価票を渡した。



3か国の郵便ポストの違いについて英語で発表する生徒

生徒の発表例：国によって違うポストの形、なぜ皇居の下に地下鉄が通らないのか、ピースサインの国による違い、都道府県別学力検査ランキングとその理由、各国の妖精、世界の家々、アメリカと日本の公立中学校の違い、世界のトイレ、風呂敷の紹介と実演、最新の宅急便システム、等

生徒によって発表の出来に差はあったが、自分でも知らなかったことを話題にして、人に伝わるように発表する技法を身に着けることを練習した。実際に英語をツールとして意思伝達することと、自分を取り巻く様々な事柄に目を向け、他人に興味を持ってもらうことを心掛けた。また、発表後に必ず英語での質疑応答の時間を設け、聞き手にも主体性をもたせるようにした。

③ 2013年11月 中野区国際交流協会主催イベント「国際交流鬼ごっこ」に参加
(生徒2名)

目的：地域への所属意識を高める。在日の外国人と交流して地域にある身近な価値観の違いにふれる。中野区にある学校として、地域の行事に参加して区とのつながりの意識を深める。

内容：中野区に在住・勤務する日本人ボランティアと外国人30名ほどで国際鬼ごっこ競技としてのルールに基づいて3時間鬼ごっこを通して交流。中野区在住の外国籍の方とチームを組み、正式なルールに基づいて鬼ごっこをする。英語での自己紹介や交流をする。ハーフタイムには和太鼓を鑑賞し、日本文化に触れる。

みんなで鬼ごっこ!

～大人も子どもも楽しめる鬼ごっこで
一緒に汗を流しましょう～

ハーフタイムに
和太鼓が聞られます

参加費：200円

鬼ごっこ指導者：藤井堅太氏

服装：動きやすい服装

持ち物：飲み物・体育館で履く靴

募集人数：外国人20人・日本人20人

お申し込みは 中野区国際交流協会 (ANIC) へ

電話かメールにて

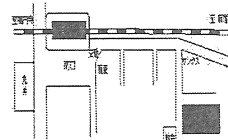


和太鼓：鬼(おかづき)
2013年6月に深澤町を代表に結成された両手
和太鼓チーム「鬼」。和太
鼓界の新人気者駆け上りとい
う意味をたら、「和太鼓界
に解禁せ！」というチー
ムコンセプトのもと、全
員がフビを自得し活躍す
る。和太鼓が持つ本来の
音の響き「一打」を太鼓
にし、一打一打に魂持ち
を込め、魂を込めて演奏
する。人を先風にし、そし
て人の心に響く響きを届
けし活躍する。

11/30 (土) **13:00~16:00**

開催場所：中野区勤労福祉会館 体育室

問合せ
中野区国際交流協会 (ANIC)
中野2-9-7 なかのZERO西館
Tel: 03-5342-9169
E-mail: anic@nifty.com



中野区国際交流協会発行のチラシ

参加者は30名程度で、幅広い年代や他国出身の方々がいた。日本人が約半数を占めていたが、ほかに中国やブラジル、韓国、スペイン等の方がいた。その後中野区の国際交流協会とは連絡を取り続けており、行事の案内等を英語科教員室の入口に貼り出してある。参加した生徒は中国の留学生達と仲良くなり、その後も連絡を取り合っているとのこと。

④キング牧師のスピーチトーナメントと背景学習

目的：人権とより良い世界を築くために人がどれほど勇気をもって犠牲を払ってきたかを学習する。英語をつかってスピーチする態度や技能を育成する。

方法：教科書の内容を学習後、「映像の世紀」や「西田ひかるの痛快人間伝」「知ってるつもり」でビデオ学習した。教科書では扱われていないスピーチのほかの部分も視聴した。スピーチトーナメントを行った。

内容を深く掘り下げて学習したため、年度末のアンケートでは「一番印象に残ったレッスン」で圧倒的に1位であった。生徒の感想からも「内容が濃く、英語以外にも学ぶことが多かったため印象が残っている」とあった。

⑤ 2014年1月～ 英語の授業にて 「実社会とのつながりを意識した英語学習」

イギリスの Uxbridge Secondary School の日本語クラブの生徒とのやり取り

目的:授業で学んでいる英語を実際に使うことで学習に意味を持たせる。

国を超えて同年代の生徒とつながることでグローバルな視野を持つきっかけとする。国際的・時事的な教材を扱うことでタイムリーに起きている話題に興味を持たせる。異なる文化背景を持つ相手とコミュニケーションをする際に大事なことは何かを考えさせる。

方法: 1) こちらから英語の授業内でビデオレターを作成、送付

内容: 歌 (英語、日本語)、日本文化紹介 (折り紙、英語で落語) 等

2) 生徒向け英字新聞 Asahi Weekly の記事を読み、イギリスの生徒にも興味を持ってもらえそうな時事的な話題を英語と日本語の両方でまとめて日本語クラブの生徒に手紙で送る。

生徒が選んだ記事の内容:

海洋生物学者がクジラと衝突しないためのアプリを開発した

日本への観光客が1000万人を超えた

大量のコカインがバナナの箱に入れられて間違っベルリンのスーパーに届いた

デンマークの動物園でキリンがライオンのえさになっている

日産が2020年までに自動運転車を販売開始する

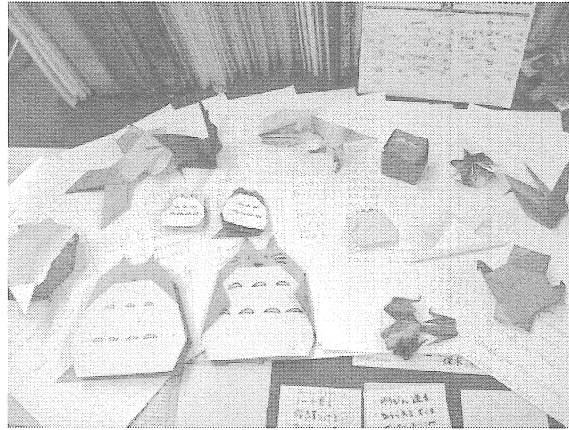
パラリンピック大会での入賞者

火星に行く計画がある

リベラルアーツ大学がシンガポールで始まった

等

生徒の手紙 「日本が中国に向けてジェット機を緊急発進させた」



生徒がビデオレターのために折った折り紙

記事を選び、それをペアで協力して英語でまとめ、さらに日本語に和訳した。次に、手紙の書き方を学習し、記事に対して自分の意見を加えるようにした。相手が日本語学習者ということで、英語と日本語の両方の手紙を作成して送付した。生徒によっては、漢字に振り仮名を振るなどの相手に対する配慮が見られた。同年代の子どもを相手に共通の話題を示すことで時事的な話題に興味を持たせ、国を超えて情報や感情を人に伝えることを試みた。最後に、この活動を通して学べたことを話し合い、クラスで共有した。現在、先方から発送済みの返事を待っている。

3 生徒の感想

年度末のアンケートでは、「1年間の英語の授業を通してどんなことが学べましたか」という質問項目に対して、英語の技術的なことのほかに、以下のような回答があった。

- ・英語を通して、知らないことを知った。
- ・キング牧師の活動に感動した。
- ・戦争のことが印象的
- ・長期留学したい。言葉を学び文化を身に着きたい
- ・英語だけでなく、いろいろなことが学べた
- ・キング牧師は、重い内容だった。スピーチがあると印象に残る。
- ・キング牧師のスピーチ大会や演説の迫力が印象深かった。
- ・戦争(自国の原爆)について、英語で学ぶ機会は新鮮だった。
- ・外国の文化について学ぶことは楽しい。
- ・サンタさんやアクスブリッジの友達に手紙やビデオを出したり、本当に「英語で交流」ができて楽しかった。
- ・自分から世界に出て、コミュニケーション能力を高めたい。
- ・世界により興味を持った。自分の言いたいことを話せるようになった。

等

1年を通して、段階を踏んで情報を収集することや、英語で意思伝達することや発表することを練習した。クリスマスにはにスウェーデンのサンタクロースに英語で手紙を発送したり、学年末に

はイギリスの生徒にビデオレターや手紙を送ることで、自国に留まらない興味をもつきっかけとなったように感じる。

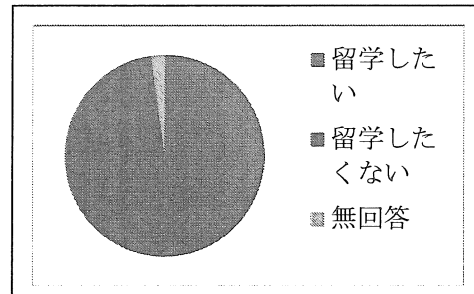
「機会(とお金)があれば海外に留学したいですか」という質問項目に対しての結果は、以下の通りだった。

回答者数90名

Yes 68人(短期 39人 長期 29人)

No 20人

無回答 2人



4 結論と課題

今回はシチズンシップを「意識した」英語学習となったが、教材研究をするほど、多くの可能性を感じた。英語の教科書にはもともと、社会とのかかわりが深いテーマが多岐にわたってバランスよくちりばめられている。それをただ表面的に捉えて語句や文法、読解といった英語それ自体の学習に留まるのではなく、深く掘り下げて外の目という観点からも理解し、国内外に関して得た情報を、国際社会を意識して発信する技能を育てることができる。より実践的であるためには、個人の授業に留まらず、科を超えた学習活動や学校全体でのカリキュラムも有効である。とはいえ、時間や費用等の問題はあある。発展的な活動に時間を取られては、基礎学力の定着を図るために必要な時間を取られるという危惧もある。しかし、与えられた教科書以外の活動に時間を割くことは一見遠回りのようにはあるが、生徒が自分の活動が社会とのつながりを実感することができれば、結果的に学習意欲の向上ということに結びつくのではないだろうか。少子高齢化が進み、2020年を過渡期に生産年齢人口の減少が問題となっている(平成25年3月国立社会保障・人口問題研究所調べ)中、日本は世界を相手にしていかないと現在の経済規模を保つことができないといわれている。グローバル化が進む昨今、より良い社会を築く担い手を育てるために、生徒には系統かつ実践的に、段階を追って国際社会に対応できるような力を育てあげることが必要であるだろう。学年末のアンケートでも海外に行きたいという意思を持つ生徒の数は75%と予想以上に多かったが、行けばよいというわけではない。実際にその地に所属し、対等に現地の人間と接することができ、所属するコミュニティに主体的に参加してこそ意味があるからだ。そのためにも、英語という授業にシチズンシップ教育を導入することは、有意義かつ必要なことである。